

マナスルへの道④

第三次登山隊二次登頂の日

日下田 實

連載の最終回は、1956年の第三次登山隊で、5月11日に登頂した二次登頂者の日下田實氏に執筆していただきました。9日の初登頂に続き、二次登頂を果たした11日を中心にして登頂の模様などを書いてもらいました。

私たち(加藤、日下田)第二次アタック隊の頂上への行動は、5月9日から始まった。この日は、今西壽雄、ガルツェンの第一次登頂隊がC6から頂上に向かった日であるし、処女峰マナスルに登られた日でもあった。

私たちは、サポートのシエルパ、オンデイ、サルキと荷揚げのシエ

ルパ4名とともにC4を出発し、午後1時ごろ、C5に到着した。

ここで私たちは、第一次隊の今西、ガルツェンを迎え、頂上のルートについて今西から聞いた。今西は「C6から頂上まではまったく心配はいらない。時間がかかったのは、この好天で頂上に1時間以上いたからだ。ただ頂上手前の岩稜

の雪庇には気をつけてくれ。第二次隊はなんの心配もいらんよ」と言って、夕闇せまるなかをC4へ下りていった。

その晩、C5では酸素を吸ってゆっくり休むことができた。

翌10日、オンデイに声をかけられ、キッチンテントに向いた。風は少しあるが、すばらしい天気だ。オンデイとストープを囲み、朝食を作る。アルファ米に八丁味噌を入れたら、おいしそうな味噌雑炊ができた。この天気とこの朝食からみて、私たちの行く手に障害のあるはずがなかった。しかし、とんでもないとくに伏兵がいて、C5を出発するときにはまったくみじめなものになってしまった。

計画では、私たちのサポートに

大塚とシエルパ3名が当たることになっていったが、C4を出るときシエルパは2名になってしまっていた。さらにこの2人のうち、サルキが完全にダウンしてしまい、シエルパはオンデイだけになってしまった。C2からは「無理するな。強行してはならん」と言ってくる。酸素担当の辰沼ドクターをまじえて協議した結果、彼が「俺が行く」と宣言し、サポートしてもらうことになった。

私たちは、大塚、辰沼、オンデイでC5を出発した。しかし、辰沼はC5に入ってからほとんど寝ていない。スノーエプロンの斜面に入ると、行動困難となり、C5に引き返すことになった。彼の荷物で大塚、オンデイで背負い、C6へ向かう。スノーエプロンの斜

面は下から見るより急で、雪の状態もあまりよくない。各自、毎分2・5リットの酸素を吸い、ほとんど休まずに登り続けた。

ほぼ中央部の岩場からプラトーマでは、第一次隊のきつたステップがあり、雪質もよくなり、快調にペースを上げた。午後1時、私たちはこの斜面を登りきり、プラトーに出た。雪と氷と岩くずに覆われた広大な斜面は、スノーエプロンの急斜面とまったく違う。荒涼としていて、天上に棲む悪魔の踊り場とも言えよう。

しかし、プラトーからの眺めは素晴らしかった。西方には、マルシャンディの谷をへだてて、アンナプルナの大連峰が連なり、そのはずれにマチャプチャレが小粋な姿を見せている。北に目を転ずると、53年のときのプラトーへの取付点となった岩が見え、そのはるか下には長大な氷河が流れ、エメラルドグリーンに輝く氷河湖が見受けられた。

ここから約1時間ゆつくりと登高を続け、午後2時半にC6に到着した。氷と岩にはさまれた雪の台地に、赤い小さなテントが張られていた。中にはエアマットがき



5月9日、登頂後、無事C5に帰り着いた一次アタック隊を迎える

れいに敷かれ、食料、燃料が整然と置かれていた。

私たちがサポートしてくれた大塚、オンディはすぐに帰途についた。自分たちの酸素を私たちのために残し、スノーエプロンの急斜面を下りていった。

サポートの二人が帰り、加藤と私だけの世界になってしまった。

加藤は酸素と登頂用装備の点検整備に当たり、私は炊事いっさいをやることにした。さつそくテントの前の日溜りにクッカーを出し、夕食の用意にとりかかった。ほとんど無風、日ざしもやわらかく寒くもない。のんびりした気分が重畳とかさなる山々をぼんやり眺め

ていた。まったく標高78000呎のプラトーにあるまじき日の憂い日であった。午後5時ごろ、私たちはそれまで想像もできなかったような食欲でささやかな晩餐を終えた。

狭いテントは2人が入るといっばいで動くこともできない。1人ずつ入り、寝袋

にもぐり込む。さすがにここでは酸素なしで体を動かすと相当に息がきれる。バカバカしい話だが、2人がテントに落ち着くのに1時間以上かかってしまった。

この夜の星空はすばらしくきれいだった。夜中に加藤が酸素ポンベのシリンドラーを交換してくれ、私はぐっすり休むことができた。

5月11日、5時に目をさます。

この日も前日に劣らぬ素晴らしい天気である。しかし、とても寒い。マイナス22度、マナスルに入ってもっとも寒い朝であった。テントサイトに陽の当たるのを待つて7時50分、私たちはそれぞれ3本のシリンドラーを背負いC6をあとに

した。

C6を出てすぐ青氷の露出しているところがあつた。深い緑色をした氷、ピッケルでたたいてみる。まるで厚いガラスをたたいているようだ。ここを通りぬけ硬雪の急斜面を越すと上のプラトーに出た。このプラトーは大きく上下に分けられる。C6はこの上下のプラトーの間の段になっているところに設けられているので、頂上付近にあるプラトーを見ることはできない。上のプラトーはほぼ正方形にちかく、全体に南西方向にゆるやかに傾斜しており、最後は相当な急斜面になっている。

9日に今西たちの通つたあとに赤旗が3カ所たててあつた。この殺風景なプラトーでは赤旗がよい目にしみる。天候も素晴らしい。時おり吹く風に赤旗がなびいている。

私たちは「シュー、シュー」という酸素の音を聞きながら頂上へ向かつて快適なペースで進んだ。毎分3リットの酸素で1時間半歩きつづけ、私たちがあとで「ニセ頂」と呼んだところで休み、シリンドラーをつけ替えた。頂らしいピークに見えた肩に急ピッチで登ると、



5月11日、頂上直下の雪面を登る目下田

その先約30分ばかりの相当な急斜面があらわれ、そこには巨大なステップがきつてあった。ここでトップを交代し、加藤が先行する。この雪壁を越えると様相が一変した。東側に雪庇の張り出した鋭い岩稜があらわれ、小さなピークがつぎ繋ぎ緊張する。二つ三つ小さな岩塔も越すと、その先に3本の赤旗がたてられた岩峰があった。頂上だ。間違いはない。私たちは緊張して先を急いだ。しかし、この岩峰は頂上の手前に大きなギャップをつくっていた。狭い岩稜に立ち、ギャップをはさんでしばらく8125m(現在は8157m)

の頂上を眺めた。頂上は私たちのいるところから約2分ぐらい高い。コルからは約7分ぐらいのフェイスになつている。頂上に雪はなく、東側に雪庇のたまごみみたいな雪がへばりついているだけだ。

私たちはそこに酸素を置き、カメラだけ持つてコルに下りた。この場所も狭い。2人でいっばいになる。落石が多く不安定な場所だ。加藤がまず登り出した。私は確保しながら16mの撮影機で加藤の最後の登攀を撮影していった。午前11時、加藤が頂上に立った。登頂の模様を撮影し、私たちは上と下でそれぞれひと休みした。私は狭いコルに腰を下ろし、はるか屏風のごとくたつているアンナプルナ連峰を眺めていた。これまでは実にうまく、何の障害もなくはこ

んできたのだが、このとき思いがけないことが突発した。

「ガラガラ」と何か落ちる音がした。ひよいと見るとわきに置いておいたカメラが、それもついでつき加藤が頂上に立つまでを撮影した16mのカメラが落ちてゆくではないか。思わず声を出し立ち上がった。加藤もびっくりして「どうしたつ」とロープを引く。カメ

ラは目の前で2度、3度大きくバウンドし、2つに別れて2000分にはあるうらマルシャンディ側の氷河めがけて私の視界から消えていった。しばらく呆然とカメラの消え去ったあとを眺めていたが、加藤にうながされ頂上に立った。

私たちは、隊長から頼まれていた頂上の石を手当たり次第ポケットに入れ、早々に二度と来ることはない頂上に別れを告げた。

さて第三次隊の成功の原因であるが、まず横隊長の統率力にあると思う。たしかに登頂時好天に恵まれたことも大きな要因ではあるが、この時期をのがさず登頂を決断した横隊長が、この好天を引きよせたものだと思う。

天候も悪化の徴候を示してきていた。全体にうすい雲がひろがり、太陽に大きな丸い虹がかかってきた。喜びにあふれ、足取りも軽く帰るべきところを、私は憂鬱であった。隊長に、依田に、皆にどうあやまつたらよいか……。

次に周到な準備であろう。53年の第一次隊、54年の第二次隊、55年の調査隊、55年の先遣隊の記録をもとに入念な基本計画の立案、それにとりまなう装備、食料の準備等、準備の段階から横隊長の意向が強く反響されていた。それが隊長などと相まって成功したものであり、成功の原因はと聞かれると横隊長の力量と言わざるを得ないのである。

私たちは、午後1時すぎ、C6に帰着した。雲は厚くはなつていたが風はない。セーターと羽毛ズボンを脱ぎ、お茶を沸かして飲み、二度と使用することのないC6を、第一次隊のやったようにきちんと整頓してから発った。一夜ではあったが思い出の多いC6をあとにして、C5もすぎ、午後7時ころC4に帰り着いた。

以上が、第二次アタック隊のあらましである。



5月11日、山頂の加藤隊員(写真はすべて「マナスル写真集」から)